



とりもどそう！ 河北潟
泳げる湖、おいしい魚、安心して使える水

CONTENTS

「七豊米」12年目の稲刈り	1p
河北潟の仲間たち・66 「キジ」	2p
河北潟流域バスツアー報告	3p

河北潟湖沼研究所での滞在記	4p
エコプロ出展10年目	7p
活動報告	
河北潟自然再生まつり、除去活動報告	8p

「七豊米」12年目の稲刈り

「七豊米」の稲刈りが、9月23日、24日（土・日）におこなわれました。農薬不使用での栽培のため、雑草に負けて収量の少ない年がほとんどでしたが、今年はこちら10年間で一番多い収穫量となりました。田んぼでは明らかに雑草が抑えられており、よく分けつした稲も目立ち、手刈りをしていても太い稲束がたくさんありました。2020年は最も収量の少なかった年で、その時の稲刈りはまるで雑草刈りのようでしたが、その後すすめたアルミ製の手押し除草機に効果がみられ、除草活動への参加応援もあったことで、収量の回復につながったように思います。

田んぼは横並びの3枚の田んぼを地主に借りて作っています。稲刈り初日は朝8時半から開始しました。今年9月初旬から稲が倒れ始め、稲刈りの日には大部分が東方向に倒れていました。渦を巻くように倒れ

ていたり、地面に伏せている稲はバインダーでの刈り取りが難しかったため、例年よりたくさん手刈りしました。午後からは体験参加の方々も加わり、稲刈り作業と稲架場づくりに分かれて作業を進めました。稲刈りがすすむと隠れていたトノサマガエルやアマガエルが飛び出しました。稲架場が完成した後は、稲束を協力して運び、稲架にかけていきます。小学生の男の子が稲束の運搬用のソリにたくさんの稲を積んで運んでくれました。1日目で、3枚ある田んぼの約半分の稲刈りを終えました。2日目は午後からの作業となりましたが、途中からお隣の田んぼの農家さんの助っ人もあり、スピードアップして午後6時頃にはすべての作業が無事に完了しました。10月8日に脱穀作業、10月9日に粃摺りをおこない、例年より早めに参加いただいた皆様への配布、販売も開始できました。

第66回 キジ

カコちゃん かほくがたチルドレン

ヒロ



河北潟干拓地にはキジがたくさんいます。目立ちませんがオスの鳴き声でわかります。高くよく響く鳴き声は、縄張り宣言といわれています。カモ類とともにキジカモ類という原始的な鳥類のグループに属しています。カモ類が水鳥として分化し、長距離を移動する渡り鳥が多いのに対して、キジ類は、主に疎林や草原などの地上で生活するように分化したグループで、飛ぶことは出来ませんが走り回る方が得意です。体は太く丸みがあり、足は短くがっしりしています。同じグループには、野生種ではヤマドリやウズラが、家禽としてニワトリがいます。クジャクやシチメンチョウ、ライチョウもキジの仲間です。

キジは、日本及びユーラシア大陸に分布していますが、日本のものをニホンキジ、大陸に分布するものを亜種コウライキジとする場合があります。オスの方が大きく全長が80cmくらい、メスでは60cmくらいになります。オスは翼と尾羽を除く体色が全体的に美しい緑色、頭部の羽毛は青緑色で、目の周りに赤い肉垂があります。メスは全体的に茶褐色で目立ちません。

ひとつ前の1万円札に描かれている日本の国鳥ですが、特別に保護されているものではなく、かつては日本でもっとも一般的な狩猟対象の種でした。狩猟資源を維持する目的で放鳥もおこなわれており、北海道を除く各都府県全体で毎年10～15万羽が放鳥されていたようです。しかし、キジが農作物被害をもたらす有害鳥獣とされたり、幼鳥単価が高騰したこと、狩猟人口が激減したことなどから、現在では放鳥は減少

しています。それでも2014年には27県で県事業としての放鳥がおこなわれています（環境省資料）。また日本には分布していなかったコウライキジも、1919年に農林省鳥獣実験所で飼育されたことを始まりとして、北海道から長崎までの20府県で狩猟増殖を目的として放鳥されてきました。その後、ニホンキジの分布する本州、九州では放鳥が中止されましたが、北海道では放鳥が続けられ定着しています（国立環境研究所 侵入生物DB）。石川県では、現在の計画においては、「狩猟資源の確保のため、キジを休猟区等の生息適地であって、鳥獣被害のおそれのない場所に、計画的に放鳥する。」とされています（第13次鳥獣保護管理事業計画書）。

現在、河北潟にいるキジはニホンキジのようです。私たちのすずめ野菜畑にもよく現れます。草藪が残してあるので隠れる場所が多いからだだと思います。どうもマクワウリ、メロン、キュウリ、スナップエンドウ、キャベツ、白菜などが食われているようです。一方で、コガネムシやカタツムリ、ナメクジなどを食べてくれていると思うようにしています。（文 高橋久）

河北潟流域バスツアー「ゴミ拾いと野鳥観察」実施報告

雨の日となりましたが、11月12日に河北潟流域バスツアーを実施しました。今回のバスツアーは昨年同様ゴミ拾いと野鳥観察を同時におこない、昨年とは少しルートを変更しました。

最初に権現森海水浴場でゴミ拾いを実施しました。行く途中は雨が降っていたのですが、海岸に着いた時には小降りになり、ゴミ拾いをしていると雨が止み、虹も見えました。海岸のゴミが多いため、みなさん驚かされていました。ここでは、バスに乗らずにゴミ拾いのみに参加した方もみられ、今後そうしたかたちで参加を呼び掛けるのも良いことに気づきました。拾ったゴミのうち、ペットボトルのみ本数を数えましたが、合計で205本ありました。外国から流れてきたゴミもみられ、ハングル文字入りの浮きを男の子2人で協力して運んでいました。

続いて河北潟東部承水路湖岸の河畔林に移動し、そこでもゴミ拾いを実施しました。湖岸に出るまでの田んぼ道を歩いていると、雁の群れが上空を飛んでいきました。堤防を越えると河畔林内に非常にたくさんのゴミが溜まっており、この状況にも驚きの声があがりました。雨が強まりましたので大急ぎでゴミ拾いがおこなわれ、15mほどの狭い範囲でしたが、合計137本のペットボトルが拾われました。まだゴミがたくさんありましたが、雨により10分弱で切り上げました。河畔林内には増水した時などに流されてきた軽いゴミが多く、発泡スチロールやプラゴミが目立ちました。ここで回収したゴミの内容は右上のとおりです。

【東部承水路左岸の河畔林にて回収したゴミ】
ペットボトル（137本）、タイヤ（1本）
発泡スチロール（ゴミ袋2袋分）
履物（6個）、ボール（15球）
缶（29本）、スプレー缶（5本）、瓶（32本）
プラ製品、食品容器、飲料容器、バケツ、鉢、
苗ポット、シャンプー、洗剤容器、肥料袋等

次に田んぼにいるコハクチョウの群れを観察することができました。親（成鳥）と子（幼鳥）の羽色の違い、コハクチョウの子育て等、野鳥の講師として参加いただいた中川さんに詳しく説明いただきました。

観察後はお昼休憩のためにバス移動をしました。バス車中では、スタッフより河北潟クリーン作戦の取り組みについて紹介しました。

金沢市牧山町の「農事組合法人まっきゃま」の中村さん宅にてお昼休憩をさせていただきました。当初の予定では牧山町のため池付近を散策予定でしたが、雨が弱まらなかったため、室内で「まっきゃま」の取り組みについて、中村さんご夫妻より、当地での環境保全型農業のことや、中山間地の抱える問題、環境保全の取り組み等についてお話しいただきました。また、参加者全員の自己紹介をおこない交流を深めました。

最後は河北潟野鳥観察舎へ行き、ミサゴやマガモ、コガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、カンムリカイツブリ等、野鳥の観察を楽しみました。

*本活動の実施にあたり、エフピコ環境基金の助成金を活用いたしました。



2023年9月7～12日の6日間、NPO法人河北潟湖沼研究所にてインターンという形で活動に参加いたしました。インターンに応募した動機としては、私が里山再生や環境教育といった、人と自然をつなげるような活動に非常に興味があったからです。本研究所は設立から約30年もの長い歴史を誇っており、地域の人々を巻き込んだ環境保全活動に積極的に取り組んでいます。大学でのボランティア活動での経験から環境の整備や保全に人々を巻き込むのは簡単なことではないことを知っていたので、どのようにして活動の主体を増やしていったのか、また具体的にどのような事業に取り組んでいるのかを学びたいと思い、石川県にやってきました。

インターン初日は、まず河北潟流域新聞の配達作業を行いました。研究所のスタッフである番匠さんと協力し、それぞれ100部ずつ携えて一軒一軒に配っていきました。今回私が配った新聞を読んでくださった町民の方々が、河北潟の自然環境に興味をもったり湖沼研究所の活動に関わってくださったりしたら、非常に喜ばしく思います。

次に、湖沼研究所の理事長である高橋さんと、スタッフの川原さんに同行し、河北潟に流入する承水路沿いの道で植物の調査をおこないました。河北潟の周辺に生えている植物は、私が普段広島で見るとは違った種類のものも多く、川原さんに色々質問して興味も広がりました。特に印象に残っているのはヤハズソウという植物で、マメ科の小さな植物なのですが、葉っぱをつまんで引っ張ってみると、葉っぱが葉脈に沿って裂け、あたかも矢筈（矢のおしり）のような形になったのでした。また、私自身は昆虫に興味があるので、調査中にクワの葉っぱの上に見つけたクワコというガの幼虫（カイコによく似ている）を解説して、皆さんに喜んでいただけました。その後、私が宿泊させてもらうことになった古民家をご案内いただきました。古民家は河北潟流域にある津幡町吉倉に位置しており、吉倉での活動拠点やイ



砂丘地畑での除草作業

ンターン生の受け入れのために使用されているそうです。

2日目は、朝から「すずめ野菜」の収穫作業でした。すずめ野菜は内灘砂丘という砂丘地で栽培されています。今回は、除草・水やり・収穫・播種の一連の作業を体験させていただきました。除草では、刈り取られた雑草を一輪車に積み、畑の隅に積んでいく作業がメインでなかなか体力を要しましたが、除草中に多くの砂丘ならではの生き物を見つけることができるのもあって、それが楽しくて全く苦にはなりません。収穫は、ピーマンとモロヘイヤの2種を担当しました。サイズが小さいのですずめ野菜ということでしたが、今回収穫したものは株立ちが立派で、野菜自体も色艶・大きさともに優れており、とてもおいしそうに感じました。白菜とカブの種蒔きをしました。

この日はそのまま、マルシェで販売するために、収穫したすずめ野菜の梱包作業を吉倉の宿で行いました。袋詰めにされた野菜がスーパーや市場で売られているのは、私を含め多くの人が常日頃から目にすると思います。しかし、梱包する過程を見る、または経験したことのある人はほとんどいないのではないのでしょうか。実は、袋を縛るテープも、値札シールも、専用の道具を使用して貼付しているのです。特に仕組みが面白いと思ったのは値札シールを作る道具でした。梱包した野菜を車に積み、マルシェの会場である金沢駅に向かいました。現地に着くとすでにお客さんが2,3

人いてマルシェの設営をお手伝いしてくださいました。設営が完了すると続々とお客さんが集い、野菜を購入してくださいました。どの方も楽しそうに野菜を手にとってくださり、「いつも美味しい野菜をありがとう」とお声がけいただくこともありました。自らの手で摘み取り、梱包した野菜が目の前で多くの方に買われていくことにとっても感慨深さとやりがいを感じました。



金沢駅西広場での「ゆうぐれ金曜マルシェ」

3日目は、干拓地で外来植物および野鳥の調査を行いました。初日とは違い、今回は車窓から見えるものを記録するという形での調査で、川原さんが外来植物を、私が野鳥を目視で探し、記録しました。干拓地の広い農地には多くの外来植物が侵入しており、特に多かったものはオオオナモミ、ヒロハフウリンホオズキ、イチビでした。この中で、オオオナモミとヒロハフウリンホオズキは私の地元である兵庫県の休耕地でよく見かけますが、イチビは河北潟に来て初めて見た外来植物でした。野鳥は今回キジやトビといった平野部の身近な種が多く見つかりましたが、チュウヒという猛禽類（湖沼研究所のアイコンになっている鳥）がいることもあるそうです。

その日の晩には、吉倉の家で懇親会があり、私は河北潟セミナーの講師として広島県での活動の事例について発表し、多様なバックグラウンドの方々にご清聴いただきました。主な発表内容は私が広島県で取り組んでいる地域資源の活用事例でした。それぞれの視点から率直なご意見・ご感想をいただき、自分の考え方がアップデートされる刺激的なセミナーになりました。その後は夕食を囲みながら参加者と情報の交換や今後の河北潟で

の事業の展開について語り合いました。

4日目は、吉倉集落にて、地域資源を発見するための「吉倉探検隊」を行いました。参加者には湖沼研究所のスタッフを含む9人が集まりました。まず、宿を出てすぐの集落の道を通って行きました。途中の橋の上から水路を覗くと、水中を泳ぐアブラハヤの群れや水面に漂う草にとまるハグロトンボなどが見えました。それから丘陵を上る細い道に入りました。森に隣接した小道で、集落を通る道とは打って変わって薄暗い環境でした。頭上をモンキアゲハやカラスアゲハといった大型のチョウが飛び交い、枝葉にはオニヤンマやオオカマキリの姿がありました。途中土砂崩れによって道が塞がれていました。8月に石川県を襲った線状降水帯がもたらした被害とのことです。右端は人が一人通れるくらいの隙間があり、通り抜けることができました。くぐり抜けた先には、広い草むらが広がっていました。この草むらはかつて水田だったものですが、耕作放棄により荒れた結果だそうです。草むらにはバッタが多く、一番よく見られたのがクルマバッタという大型のバッタで、動きが速いので捕まえがいがあり、子どもたちも夢中でバッタを追いかけていました。草むらからさらに進むと、最奥にため池がありました。現在は利用されていない池ですが、水面にヒシという水生植物の葉が茂っており、30分ほど網を入れてみた結果、マツモムシやメダカ、ヒメゲンゴロウといった水生生物がたくさん捕獲されました。これには子どもたちも大喜びで、達成感がありました。吉倉地区の自然には体験活動の場としての大きなポテンシャルを秘めており、人の手を加え



古民家での河北潟セミナー



ヒシがたくさん生える溜め池で生きもの探し

る、つまり里山再生を行うことによってさらにフィールドの価値が高まりそうだと感じました。

5日目は、午後から河北潟自然再生まつりの実行委員会に参加しました。委員会には河北潟湖沼研究所のスタッフだけでなく、河北潟干拓土地改良区の方や農事組合法人の方など多様な所属の方々が参加されていました。そのため、考え方の違いにより意見が分かれることもありましたが、終始和やかな雰囲気での会議だったのが印象的でした。実行委員会のメンバーは昔ながらの付き合いで、信頼関係が築かれているとのこと。また、多様なバックグラウンドをもつ方々が寄り集まって企画を行うことで、多彩かつ規模の大きいイベントができるのだと感じました。

委員会が終わった後は、そのまま高橋さんと川原さんに河北潟周辺をご案内いただきながら、河北潟に関する歴史と現在、今後向き合わなければならない課題についてお話を聞きました。河北潟の干拓地は人為的に排水されることによって維持されていて、その維持費は毎年(?)数億円にもなります。しかしその一方で干拓地での農業の衰退や河北潟のゴミの漂流・生物多様性の低下といった問題が起こっています。さらには、河北潟流域の住民との、河北潟や干拓地との関わりも薄れつつあるとのこと。住民と河北潟がかつての関わりを取り戻し、河北潟が住民にとって広い意味での豊かさをもたらすものになることを目指さなくては、と一個人として感じました。

6日目は、稲架掛けをしておいた稲を脱穀する作業を午前中に行う予定だったのですが、米の水分量が高かったので断念し、河北潟環境対策期成同



砂丘上から河北潟放水路、干拓地、潟を望む

盟会主催の「河北潟見学ツアー」に途中参加しました。同行した川原さんの「河北潟クリーン作戦」の活動紹介を聞き、長年にわたり行われている河北潟クリーン作戦が、多くの人々を巻き込んでいった経緯を詳しく知ることができました。近年は作戦エリアも拡充し、カヌーやSUPを活用した水上のゴミ拾いも行われるようになったようで、水上スポーツとゴミ拾いを組み合わせるのは素晴らしいアイデアだと思いました。

以上が、私が河北潟湖沼研究所で体験させていただいた活動になります。今回のインターンシップを通して感じたことは、研究所は新しい事業に次々と取り組まれている一方で、長きにわたり継続的に取り組んでいる事業もとても多いということです。ここ数年はコロナ禍の影響で全国的に途絶えてしまった事業やイベントが多い中、そういった多くの逆境を乗り越えて活動を維持していることに衝撃を覚えました。さらに、河北潟クリーン作戦や野外調査など、活動の中で得られる数値データを蓄積し、積極的に論文を投稿していることにも驚嘆しました。環境保全を行うNPOは数多しといえど、論文投稿による社会貢献を果たしているものはそう多くないのではないかと思います。多面的な活動の堅実な積み重ねと新しい事業にも意欲的な姿勢が信頼を勝ち取り、現在多くの仲間やサポーターを獲得しているのだと思いました。

今回、実に多くのことを河北潟湖沼研究所から学ぶことができました。改めまして、お世話になりました高橋久理事長、スタッフの川原さん・番匠さん、その他多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

エコプロ出展10年目 2023年12月6日(水)～12月8日(金)

東京ビックサイトで毎年12月に開催される環境展示会「エコプロ」に出展して、今年で10年目をむかえました（2020年は新型コロナウイルスの関係で会場での開催中止。当時は「エコプロダクツ展」であったが2016年から「エコプロ」へ改称される）。初回の2013年は「七豊米」の田んぼの活動PRをおこない、田植えや稲架干しの活動写真とともに、粳・粳穀・玄米・斑点米・白米をシャレに分けて展示説明し、精米して持参した七豊米を販売しました。翌年からは「生きもの元気米」の活動をメインで紹介するようになり、2014年は「石川県最大の湖「河北潟」からネオニコフリエアをひろげよう！」とタイトルを掲げ、ネオニコチノイド系農薬の問題と、「生きもの元気米」の目的、活動内容をPRしました。2014年は入り口横で場所が良かったこと、来場者数161,647人と多かったこともあり、売上も10年の中で最も良い成績を残しています。エコプロの開催規模は、新型コロナウイルスの問題がおきる以前の2018年は、出展数747社・団体、1650小間、来場者数162,217人でしたが、その後、イベント規模は小さくなり、今年は社会インフラテックなどビジネス展と合わせてSDGs Week EXPOとされましたが、全体でも442社・団体、966小間、来場者66,826人とのことでした。NPO・NGOは、初回の2013年には99団体の参加がありましたが、2023年は20団体のみとなっています。出展費用が上がったことも参加者が減少した一つの理由と考えられ、NPO・NGOコーナーは、2013年は1小間（1.8m×2m）

12,500円、1団体2小間申請することも可能でしたが、2023年は1小間（2m×2m）が44,000円となり、1団体あたり1小間までとなりました。多様な人が関わるNPOには、スタッフメンバーが複数集まるところも少なくありませんが、2人いると立つ場所に困るほどの狭さなので、お互いに隣同士で遠慮していました。

今年は河北潟クリーン作戦実行委員会においてLOVEBLUE助成を受け、河北潟のごみの問題や、長年にわたる「河北潟クリーン作戦」の活動について活動PRをさせていただきました。毎年のクリーン作戦、今夏におこなわれたカヌーやSUPでのクリーン作戦、色々な企業団体も参加し大勢が協力して実施することにより、たくさんのゴミが湖の水辺から回収されている状況を伝えました。ゴミ問題に関心をもつ子どもたちも少なくなく、グループで訪ねてきた小学生や中学生たちに、写真などを見せながらしっかり伝えることが良かったと思います。また、全国各地でゴミ拾いなどの活動をしている大学生や団体さんとも情報交換することができました。そしてお米の応援もいただきました。「生きもの元気米」や「七豊米」が美味しかったので楽しみにしていたとお声をいただいたり、エコプロで長年応援いただいている方も今年もまた来訪いただき、出展して良かったと思いました。エコプロの前日はいつも準備に追われ、寝不足で会場まで車を走らせ、疲れを感じることもありますが、今年も無事に来場できたことに感謝しています。（文 川原奈苗）



河北潟自然再生まつり

開催14年目となる「河北潟自然再生まつり」が2023年10月22日（日）に開催されました。今年は他のイベントと重なり、参加者が少ない状況で残念でしたが、午後からは来場者も増え、セイタカアワダチソウ抜き取り大会など、親子が楽しく参加しました。

今年は河北潟クリーン作戦実行委員会の参加により、ゴミを減らすためのキャンペーンとして、パネル展示や、めった汁などにリユース食器が利用されました。当日チラシにもゴミ調査の結果報告や、クリーン作戦の活動紹介が掲載されました。

当団体の担当プログラムでは、昨年が続いてエフピコ環境基金の助成を受け、ミニクリーン作戦としてゴミ拾いとゴミ調べを実施しました。道路わきの草むらにポイ捨てゴミが多く、ペットボトルや空き缶の他、ゴミをまとめて入れて捨てられたレジ袋も複数確認されました。ペットボトル46本、缶32本などが回収されました。セイタカアワダチソウの花染めはハンカチ染をおこないました。生きもの元気米の「五平餅」の販売もおこない来場者に喜ばれました。

恒例行事となっている「投網投げ」は、今年も地元の小浦さんの協力をいただいて実施でき、多くの方が投網投げを体験しました。セイタカアワダチソウ抜き取り大会は、抜き取った根の先から頂部までを計測するものですが、今年は背丈の高いセイタカアワダチソウがたくさん抜き取られ接戦となり、歴代1位の437cmが記録されました。



外来植物除去活動の報告

2023年11月18日（土）に金沢市大場地区の農業排水路にて、11月23日（木）には、かほく市指江排水機場周辺の排水路にて、外来植物チクゴスズメノヒエ除去活動がおこなわれました。18日は天候が悪く延期も検討されるくらいでしたが、23日は晴天で気温も高く作業をしていると暑くなりました。今年の豪雨による影響がみられ、昨年綺麗に除去したところでも増水により土砂が溜まって、群落が拡大しつつありました。両日ともに大変な作業でしたが、丁寧にチクゴスズメノヒエが取り除かれました。大場土地改良区、荏原商事(株)、(株)尾山製作所、昱工業(株)、指江、内日角の生産組合、(株)柿本商会、北菱電興(株)、マサコンサルティング(株)、河北潟沿岸土地改良区、河北潟湖沼研究所が参加しました。



「生きもの元気米」冊子作成

多くの方に興味関心をもっていただけるよう「生きもの元気米」の目的や経緯、生産農家の声、調査結果概要、生きもの元気米の特徴など全般を紹介した冊子を作成しました。LUSH Re:Fund Local 助成を受けて作成することができました。



編集後記

セイタカアワダチソウ抜き取り大会、根っこを長く掘り出した人もみられて、来年は軍手のほかにスコップも用意したほうが良いと思いました。(N)